相模経済新聞　2022年6月10日号

宇宙生命哲学

ことはじめ

45

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者
伊藤　俊洋

異国の地での恩師の告別式

人の死は、ある日、突然やってくる。大震災、津波、交通事故、観光船の遭難、そして戦争。パンデミックをはじめとする病気や寿命を全うして、穏やかに迎える死もある。私は、どんな死でも、絶望的なものはなく、死の先には必ず新しい生命への復活が約束されていると常々考えている。

最近の2カ月の間に、3名の身近な人（65歳の医療従事者、91歳の姉、84歳の恩師）との別れを経験した。3者3様の別れであったが、コロナ禍、またウクライナ戦争の中、人を送ることの意味について深く考えさせられた。

ここでは、私が40数年前に、米国のY大学でお世話になったY博士の告別式について紹介する。Y博士は、1937年に台湾で生まれ、ヒトの脳の機能と深い関係のある複合糖脂質（ガングリオシド）の研究で輝かしい研究成果を挙げ、米国神経化学会の会長を歴任され、多くの名誉ある賞を受け、在米台湾人社会のスーパースターの一人であった。

私が大学での仕事を終えて米国を発つ時に、Y博士は私の実験ノートの片隅に、「Run, run, don't stop run!!」と書いて下さった。たとえ恵まれない環境であっても、走り続けて人生で目指す仕事をやり遂げるように、との教えであった。私達は、その後も互いに走り続け、時には両国を行き来しながら交流を深めていった。Y博士は、私が会長を務めた日本油化学会の欧文誌の編集委員を20年の長きに渡り務めて下さった。私は、地球環境と生活環境の両立を図る策として、「宇宙生命哲学」という新しい概念を創出し、「人の一生は素敵な地球人になる終わりのない練習である」との考えに辿り着いた。その原点は、Y博士の「Run, run, don't stop run!!」にある。

米国での恩師の告別式

Y博士は、5月18日に亡くなられ、告別式は、米国・ノースオーガスタの斎場で行われた。式の模様は、オンラインで世界中に放映され、私は自宅で参観した。

Y博士の神経科学に関する優れた研究と共に、ヒューマニティー、ユーモア、多彩な趣味など、博士の豊かな人生の一端が、式を通じて思い出された。

宗教色はなく、日本で言えば、いわゆる故人を偲ぶ会を思わせる式であった。

一方、誰に看取られることもなく、殺戮され、土に埋められ、火炎で焼却される市民が、今、この時も地球上に数多くいることに強い畏怖の念を持った。